



### ★私が日本のために頑張りたい

これはいろいろな学部の学生が「カ所」に集まってくるといって、他にはあまりない機会でもあった。映画が上映される前に皆気ままに雑談しているのだが、「面白いのが」「自分は世界で一番優秀だぞ」というオーラを発している人がいたるところにいて、教室全体がかなり異様な雰囲気になってくるのである。そんな学生が数多く存在するというのはやはりMITならではだろう。将来ノーベル賞を取る人が隣に座っていたとしても、全くおかしくないところなのだから。

そういうMITに留学できたのは、石坂財団(国際文化交流財団)の奨学生に選ばれたということも大きく作用していると思う。今、私は学生を選ぶ側にいるが、やはり非英語圏からの志願者はいろんな面で不利だ。アメリカの大学院への応募書類はGRE(Graduate Record Examinations)とTOEFLというテストの点数、大学の成績表、志望動機説明書(エッセイ)、そし

て三通の推薦状から成るのだが、エッセイは学生のつたない作文力を如実に反映してしまうし、日本の教授が書く推薦状は型にはまった堅いものが多い。アメリカの大学から志願してくる学生と比べると、書類上かなり見劣りするのが普通である。しかし、権威のある奨学金を取ってきていると総合的な印象が、がらりと変わってくるのである。私がアメリカに踏み出す第一歩を後押ししてくださった石坂財団および日本万国博覧会記念機構に、改めて心から感謝を申し上げます。

私はこれまで地殻構造や地球の熱史という基礎研究を主にやってきた。しかし近年、資源問題やエネルギー問題が世間で盛んに議論されるようになり、そういう文明の存続に関わることにも貢献できないだろうか、と真剣に考えるようになった。たとえば、環境に優しい再生可能エネルギーとして有望視されている地熱発電は地球物理の問題でもあり、いろいろ調べてみると、基本的なことがまだ十分に理解されていないのである。今後は基礎研究だけでなく、エネルギー問題への応用を視野に入れた研究も展開する予定で、そして将来、日本の資源・エネルギー問題に何らかの形で貢献できたらと願っている。

2006年、アメリカ地球物理学連合から最優秀若手研究者に与えられるMacelwane Medalを授与された。

ある。今後は基礎研究だけでなく、エネルギー問題への応用を視野に入れた研究も展開する予定で、そして将来、日本の資源・エネルギー問題に何らかの形で貢献できたらと願っている。

本奨学事業は、日本万国博覧会記念機構(<http://www.expo70.or.jp/>)の助成金を得て実施している

中央公論

特大号

11月号

発売中!

特別定価 900円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7

中央公論新社

TEL 03-3563-1431

政治崩壊

総力特集

麻生・小沢のバラマキ路線で大丈夫か 与謝野馨 聞き手 田原総一郎  
 自己管理できない政党が日本を蝕んでいる 佐々木 毅  
 新自由主義か社会民主主義か 竹中平蔵×山口二郎

劣化した政治家が失った「狂熱的なもの」 保阪正康×御厨 貴×井上寿一  
 国家の再生を阻む中央の「統制」を解除せよ 片山善博  
 衆議院300全小選挙区 シミュレーション

大恐慌の瀬戸際か 竹森俊平／行天豊雄／熊野英生

未熟な日本語こそが最大の武器になる 対談 筒井康隆×楊 逸 特集 あえていま教養のスタンダードを探る 池澤夏樹×坂本龍一<sup>氏</sup>

# 世界水準が体感できたMIT留学

国際文化教育交流財団奨学生（一九九四年度）。

九二年東京大学理学部地球物理学科卒業。九四年に同大学大学院修士課程修了後、マサチューセッツ工科大学に留学。二〇〇〇年に博士号を取得。カリフォルニア大学バークレー校ミラー基礎科学研究所特別研究員を経て、二〇〇三年からイエール大学で教鞭を取る。

アメリカに来てもう一四年になる。一四年前の自分が将来について何かプランのよくなものを持っていたか、と思いつくとしてみても、なかなか思いつけない。私の性格からして、先のことはあまり深く考えてなかったように思う。しかし、憧れの地で研究できることに對する期待で胸が一杯だったことだけは、はっきりと覚えている。

## MITとウッズホールでの 五年間

留学先のマサチューセッツ工科大学（MIT）はボストンの隣のケンブリッジにあるが、そこから車を二時間くらい走らせると、ケープコッドという風光明媚なところに着く。ここは有名な避暑地なのだが、ウッズホール海洋研究所という研究機関も

イエール大学  
地球科学科准教授

是永 淳

これなが  
じゅん



あって、一九六八年からMITはこの研究所と共同で海洋学の博士コースを運営している。当時の私は、海底地球物理学を勉強していたので、この共同プログラムの学生になったわけである。

日本での知名度はよくわからないが、MITは理工系の分野全般にわたり世界トップクラスで、地球物理学でも当時は豪華な教授陣を抱えていた。同時に、学生に要求されるレベルも当然高く、また誰も口にはしないが、学生同士の対抗意識のようなものもあり、良く言えば「刺激的」だが、ストレスもたまりやすいところでもある。ウッズホール海洋研究所にも数多くの著名な研究者がいるのだが、避暑地にあるせいだろうか、MITとは対照的にのんびりしたところだった。

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三十七カ国四九三名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

約五年間の学生生活のうち、最初の一年は主にケンブリッジで過ごし、次の二年間はケープコッドで暮らし、最後の二年間はまたケンブリッジに戻って、と慌ただしかったが、これは博士号をとるまでにさまざまに事情で計三人の指導教官のお世話になったためである。三人とも全く異なるタイプの研究者で大変貴重な経験をした。特に二人目の教官は学生を「教育」しようというつもりがあまりなく、自分が得意な分野は自分でやったほうが一番だから、自分あまり知らないこと（≠指導できないこと）を学生にやらせるといふ、なかなかの強者であった。かなりの荒療治ではあったが、全くの独学で未知の分野に踏み込んでいくという根性は、彼のおかげで身についた気がする。

学問に関係ないところで特に懐かしそうなのは、学生が運営している「映画館」である。大講義に使う階段教室を使って、週末の夜に最近の映画を上映するものだが、一回二ドルと安いので、よく観に行っていた。